

まず「自由」という概念を無限定的に使用することを警戒し、つぎに「自由」と「必然性」との関係のべ、さらに、目的と「自由」の関係についてのべ、「自由」概念を一応規定する。これを前提として、「所有」が人間にとっては、特殊な「自由」形態であることをのべ、「所有」という「自由」において、はじめて、「人格」が完成態として形成されることを論証した。

社会思想史における個人概念の変遷

——所有と自由——

大 井 正

Transition of the Concept of
“Individual” in the History of
Human Social Thinking

——Property and Freedom——

Tadashi Oi

1. 人間生活における「所有」の意味

すでに『政経論叢』に発表した「分業における個人の形成」の続きとして、この表題の問題を追究したが、まず最初に、所有（占有）とは生産の根本形式であることを説明し、しかも、この所有（占有）は、必然的に共有形態をとることを論証した。

2. 「共有」のもとにおける「個人」

「共有」のもとでは、人間は、真に「個人」として、すなわち、1個の主体的人格として形成されないことを指摘した。

3. 「私有財産の起源」の論理

エンゲルスの『私有財産の起源』を一応継承し、さらに「疎外」の論理を用いて、「共有」から「私有」が生れる過程を説明した。そのさい注目した概念は、剰余生産物である。

4. 「所有」における「自由」